人は二度生まれる、自分が自分の主人になるために～

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）　**金屋光彦**

“人は二度生まれる。一度は存在するために、二度目は生きるために”

そう述べたのは、18世紀の啓蒙思想家ジャン・ジャック・ルソーである。大学時代、彼が記した「告白」が無類に面白く、エミールはじめ彼の魅力的な数々の著作を原著で読みたいと思い、東京・お茶の水のアテネフランセに通ったりしたこともあった。

それは余談だが、二度目の誕生とは、いうまでもなく思春期の自我の目覚めを指している。

この思春期での発達課題である「自我の独立」を、関係性の中でいえば「母子分離」となる。長く青少年を対象にした職業自立支援の仕事に携わってきた中で、受け身で大人しい、いわゆるひきこもりモードの若者にたくさんお会いし、支援させてもらってきた。

彼らはどこからやってきたのか？　なぜ、このような主体性や自発性が薄く依存の強い特性が生じたのだろうか？という疑問の一端が、その後に就いたスクールカウンセラーの仕事を通して、実感を伴って解けた思いがあった。その謎の解明は、主に不登校児童生徒の支援を通して、学校現場や家庭での子どもたちの在り方に、教えられてきたところが多い。

「転ばぬ先の杖」、という言葉がある。思春期に突入した中学生を持つ親は「かわいい子には旅をさせよ」への意識転換が必要だ。英国から独立したインドのように、人生の主役の座を本人に明け渡し、自治権を与えねばならない。つまり、子どもに降りかかる試練は、子ども自身が引き受け、自ら格闘し、乗り越えるべきと考えるのだ。その結果、問題解決の引き出しが増えていき、それがいわゆる生きる力へと育っていく。これが蓄積された向こうに、大人になる入り口が見えてくるのだ。

ところが、この時期になっても、相変わらず問題が起こると、親自ら騒ぎ立て献身的に動いて解決してしまう、いわば、未だ主役の座に留まり、問題発生当初からドラえもんのごとく振る舞う保護者が後を絶たない。わが子を思う心は、尊重してあげたいと思う。しかし、それは、子どもたちにとって、発達阻害要因となって将来に重くのしかかっていく。愛情深いお母さんほど、この陥穽にはまりやすい。

そうした養育態度の中で育てられた子どもは、何か面倒が起こると常に周囲のせいにする依存の強いパーソナリティ人間になっていく傾向が強い。そのことを示唆する悲劇があった。

2009年１月、中央大学のＴ教授（当時45歳）が、教え子のR青年（当時27歳）に殺害された事件である。「真面目で大人しい」、「人づきあいが苦手」と評されていた犯人のR青年、有名大学へ現役合格し犯罪歴もないごく普通の大人しい若者の彼が、なぜ事件を起こしたのだろうか？

R青年は、母親が30代後半になってやっと授かった子だった。その時、母親は次のように考えたという。

「世界で一番幸せになってもらおう。辛いことや嫌なことには絶対遭わせないようにしよう」

このため、小学校から付き合う友人も母親が制限し、成人後の服も母親が購入し、就職後は独身寮に母親自ら洗濯に通ったという。その後短期間で転職を繰り返した結果、生活レベルが下がることに不満を募らせる彼に、母親は「Ｒちゃんは悪くない。会社が悪い」といい、「なぜ息子を評価してくれないのか」と会社に電話することもあったと聞く。支配的で過干渉ともいえる母親の盲目的な愛情が、彼を受け身で被害者意識の強い性格にしていったと推測することは難しくない。

Ｔ教授は気難しい彼を案じていた。被害者意識の強い彼は「人生が狂ったのはＴ教授のせいだ」との想妄を募らせ、恩を仇で返す暴挙に出た。その結果、自らの人生にもとどめを刺したのだった。

自分の人生の主人は、自分である。ならば、人生上やってくる試練は、自分がまず向き合い格闘するべきなのだ。保護者は、じっとこらえて手を出さずに見守る、その覚悟を、親も子どもも思春期に決意する。そのイニシエーションの大切さは、将来楽しく働ける人になるためにも、計り知れない。そのことを胸に秘めながら、日々支援を行っている。